

---

# GENSIZIN ~原始人~

らんと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GENSIZIN（原始人）

### 【Zコード】

Z7918Z

### 【作者名】

らんと

### 【あらすじ】

ある日少年は原始人になつた！？

これは友達に書いてもらつた話です。

ところどころおかしな部分がありますが  
気にせず読んでください。

## 原始人

### 1 少年

少年はソーセージ（男根）とピーチ（尻）の用事を済ませに行っていた。少年が出てくると、母が待っていた。少年が歩き近寄ると、母はいきなり怒鳴った。

「あんた、どこ行つてたの？ お母さん、時間ないんやで。あんた、1人で帰つてきてよ」

そう言うと母は行つてしまつた。

（置いて行かれた……）

少年は母に置いて行かれた。

しばらく呆然としていた少年が周りを見渡すと、ベンチ上にメモが置いてあるのを見つけた。

「あつ、メモだ……」

メモには、「電車代はここにあります」と書いてあつた。

（お母さん、意外にやさしい）

少年は、何故か涙が出てきそうな気持ちを抑え、メモに書いてある所に行つてみると、そこには、10円玉があつた。

（あつ、10円玉……）

そして、10円玉の横には、またメモが置いてあつた。少年は、そのメモを手に取り眺めた。またしても、お金の場所だ、と少年は思つた。これ何度も繰り返し、相当な時間を費やしたものの、少年は何とか電車代を全部集めきつた。疲れ切つた少年は揺れた足取り

で駅に向かった。すると、放送で、

「本日最終の電車は只今、出ました～」

少年はズコーンとなつた。

少年は電車に置いて行かれた。

結局、少年は駅で野宿をした。

次の朝

少年は駅員さんに起<sup>ひ</sup>された。

「ちよつと、お密さん。こんなとひで寝てたら風邪ひきますよ」

少年がムクッと起き上ると、駅員さんの態度は急変した。

「おい、金出せや

と言われ、カツアゲされた。

少年は全く状況が分からず、田を擦りながら素直にお金を出した。

「ちつ、これだけか。でも、まあいいか……。じゃあな～」

駅員さん？はそう言<sup>ひ</sup>つと、どこかへ行つてしまつた。

「はっ！」

少年は今、気づいた。

(あ、お金渡しちゃつた)

少年はお金に置いて行かれた。

少年は跪き、絶望的になつた。

そこから、少年の想像絶する旅は始まつた。

大地を走り、山を登り、湖を泳ぎ、少年は家を田描して進み続けた。

それから、1か月後

少年は何とか家に戻つたが、母は何もなかつたかのように生活していた。何を聞いても、「知らない」と言つた……。

次の日、学校に行った。友達も先生もいつも道理に生活している。  
友達に聞いても、母と同じように「知らない」と言つた……。

（僕はどうなったんだ……）

その日は、遠足（山登り）だった。みんなはぐんぐん登つていいく。  
少年は、この1か月の旅のせいで疲れていた。どれだけ言い訳をし  
ても皆は信じてくれない。

「ちょ、ちょっと……。みんな……。待つて……」

少年が下を向いていると、みんなは先に行つてしまつた。

少年が上を向くと、もうみんなはいなかつた。

少年は友達に置いて行かれた。

少年、2度目の絶望。

少年は帰り道が分からなかつた。夜まで、出口を探したが、見つか  
らなかつた。しうがなく、少年は駅で野宿したよつこに止で野宿し  
た。

そして、次の日、その次の日、と月日が過ぎて行つた。  
しかし、一向に出口は見つからなかつた。

（この山。一体、どうなってるんだ……）

少年はため息を吐き、また歩き始めた。

1ヶ月後

少年は、ついに出口を見つけた。

## 2・原始人

しかし、

少年は『原始人』になっていた。

『人類の進化に置いて行かれた。』

少年は完全に人間の言葉を理解できなくなり、「ウホ」しか言えなくなつた。打製石器を手に構え、完全に原始人と化していた。

少年は町に下りて行つた。

「ウッホウホー！」

少年が町の人々に近づくと、町の人々は恐がつて逃げて行つた。少年はその後を追つていつた。

すると、警察が来た。いきなり、検問が始まつた。

「え～っと、君。名前は？」

「ウホ、ウホ、ウホ」

少年はうなずいた。

「こいつ、何て言つているんだ？」

警察官がほかの警察官に聞いている。

「よく分からぬが、あなたは原始人さんですか？」

「ウホ」

少年はうなずいた。

「で～、原始人さん。ここで何を……？」

「ウホッ、ウホウホ、ウホ～、ウホウホウホ。ウッホー！」

「……全く理解できない……」

「どうする?」

「まあ、悪者ではなさそだから、自然に帰しちゃえば?」

「うん。まあ、そうするか」

「ほら、その石器だけは取り上げておこう」

警察官は少年から打製石器を取り上げた。

「ウホ~」

少年は、寂しそうに山へ去っていった。

数日後

少年は町で「ウホ」を言いまくった。

さらに、数日後

町で「ウホ」が広まり始めた。

さらに、時は経ち、数ヶ月後

なんと、「ウホ」が流行語大賞になつた。

その日はもう、町では、1日中「ウホ」しか聞こえなかつた。

それから、3年後

「ウホ」は3年も連續で流行語大賞になつていた。

そして、少年は……暇であった。

すると、見知らぬ女性が歩いてきた。

「ウホ?」

「頑張つてください」

そう言つと、女性は少年の目の前に国語辞典を差し出してきた。そして、恥ずかしげに一日散に逃げていった。

「ウホ?」

何だかよく分からないが、この時、少年は人間なる(戻る)決意をした……よつに思えた。

少年は国語辞典を開いた。

そして、「あ」の字を指差し、言った。

「ウホ

「い」も……

「ウホ

これを、50音全部繰り返した。

「……ちがーウホ！」

少年は「違ウホ」とこの言葉を覚えた。

そして、数日後

「よしウホ。良いことをウホ。思いついたウホ  
普通にはしゃべれるようになつたが、  
毎回、文の最後に「ウホ」をつけるようになつっていた。  
「これをウホ。わらじベ長者みたいにウホ。交換してもうおウホ」

少年は国語辞典を漢字辞典と交換してもらつた。

そして、漢字辞典を和英辞典と。

和英辞典を英和辞典と。

英和辞典を鉛筆削りと。

鉛筆削りを鉛筆と。

鉛筆を消しゴムと。

消しゴムを煉りけしと……。

少年は運に置いて行かれた。

「つて逆わらじベ長者じやねえかウホ

「こんなもんいるかウホ！」

少年はトイレに練りけしを入れた。

すると、

女神様が出てきた。

「あなたが落としたのはこの

普通の煉りけですか？ それとも、  
金の煉りけですか？ それとも、

黄金のうんちですか？」

（何で、うんちがウホ？）

「じゃ、じゃあウホ。 黄金のうんちでウホ……」

「あなたは嘘つきですね。 ですが、全部あげましょ。」  
そう言い、トイレの中へと消えていった。

「……ウホ？」

少年は黄金のうんちを両手に持ち、歩き出した。  
しばらくすると、超ウルトラセレブ様が超高級プリウスに乗つて少年のほうに近づいてきた。

「何ウホ？」

「君。それを見せてくれないか？」

超ウルトラセレブ様に言われ、少年は黄金のうんちを見せた。

「こ、これは……」

「何ウホ？」

「僕のお父さんのいとこのおばさんの働いているスーパー・マーケットによく来る主婦が飼っている犬のワンについでいるハエを食べるカエルを食べる蛇を食べる鳥を昨日食べたお父さんの一年前に亡くなつた弟の形見だ」

（普通にお父さんの弟って言えば良いウホ。 ていうか、どんな形見ウホ）

「これを僕にくれないか」

「別に良いウホ」

少年は黄金のうんちを差し出した。

「ありがとう。 これでお父さんも喜ぶよ。 あつ、君。 何か、欲しい  
ものはない？ お礼に何か買つてあげよう」

「車ウホ」

「えっ、車かー。これがないと困るけど……。良いよ。これを君にあげよう」

「やつたウホ

「あつ、もうこんな時間だ。僕もう行かなくちゃ。じゃあね  
そう言つと、超ウルトラセレブ様は「車」に乗つて、どこかへ行つ  
てしまつた。それを見送つた後に少年は気づいた。  
(あいつ、くれるつて言つたのに何考えてるんだ。……逃げられた)

少年は車に置いて行かれた。

この時、少年は怒りで人間として再復活を遂げたのであつた。

### 3・覚醒

その後

少年は金の煉りけしとクマの人形を交換してもらつた。何故か、少年はクマの人形を大切にした。

ある日、少年が銀行の前を通りかかつたその時

中から激しい銃声が聞こえた。すると、中から強盗が出てきた。しかし、少年は気づいていない。

「おい、動くんじゃねえ。動いたら、撃つぞ」

そう言われたが、少年は恐怖のあまりか、無視して通り過ぎて行った。

「ドキューーン！」

銃声が鳴った。

しかし、少年は生きていた。代わりに、少年の手の中にあるクマの人形に穴が開いた。

少年は後ろを振り向いた。

強盗は笑っている。

「よくも、俺のクマを……」

「へつ、たかが人形だろ」

「許さない……！」

少年の周りにオーラが発生し始めた。

次の瞬間

少年は 大猿 と化した。（スーパー原始人）

少年は銀行いや、町の4分の1を破壊した。  
しばらくすると、少年は 少年 に戻った。

数日後

少年は大量の猿を集めていた。部下を集めていたのだ。  
「絶対に世界を征服し、人間どもに復讐してやる」  
もう、少年は 魔王猿 と化していた。（スーパー原始人2）  
風格はもう人間ではなく、魔王になっていた。豪華な椅子に座り、  
猿たちを従えていた。少年の手には、修復したクマの人形があった。  
「クマ。君を撃つた人間に絶対に復讐してやるからな」  
今、ちょうど、猿が10000匹集まつた。

次の日

少年は猿たちを連れ、町へ攻め込んだ。

町は、少年と猿たちの破壊と殺戮の攻撃により、全壊した。

「ふつ、はつはつはつは。したぞ。復習してやつたぞ。ぐおおー！」

少年は雄叫びを上げ、部下たちの方を向いた。

部下たちはいなかつた。

（置いて行かれた……）

少年は部下に置いて行かれた。

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

この時、少年は 小猿 になった。（スーパー原始人3）  
3と言つても、小猿なので、逆に力が弱くなつた。

それから3か月後

少年は別の街の中をぶらぶらしていた。姿は、普通の猿なので、人  
間によく観られる。

すると、2人のヤンキーが近づいてきた。  
ヤンキーとすれ違つた瞬間

少年は軽々とつかみあげられ、建物と建物の間に連れて行かれた。そして、逃げる間もなく、ヤンキーの1人に縄で縛られてしまった。

「おい、猿。良い物を持つてるじゃねえか」  
ヤンキーは少年からクマの人形を奪い取り、

「さうだ、まだねえせんだけへ、ひへ」

そう言つと、ヤンキーは、クマの人形を近くにあつた焚火に放り込んだ。

少年  
は

人形が燃え尽きた……。

少年の心の中は真っ白になつた……。

少年はクマの人形に置いて逝かれた。

その時、少年の心にかつてないほどの怒りが生まれた。どうしても抑えきることのできない怒り。まるで、真っ白な世界で水素爆弾が爆発したかのように。少年の怒りは爆発した。

ヤンキーが驚いている。

「な、何だ!?」

少年は一瞬、8000メートル（エベレストの標高）ほどの大きさになつた。

歩いただけでも、町が1個。それどころか、島が1つ粉々になるほどの大引きだ。

しかし、それはほんの一瞬だった。巨大になったかと思うといきなり小さくなり始めた。

そして、しばらくすると、元通りの人間と同じぐらいの大きさに戻った。

少年は 黄金猿  
へ覚醒を果たしていた。これが伝説の……（スー  
パー原始人4）

「消える……。世界。消える

！」

少年は、超爆発波をした。

世界は吹き飛んだ……。

反動が大きかつたらしい。

少年はその場に倒れこんだ。

「ぐふつ。あ、あの時……トイレに行かなければ……。ガクッ」

少年は力尽きた……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7918z/>

---

GENSIZIN ~原始人~

2011年12月25日14時52分発行